

安楽寺寺報

開光

第90号 涅槃会号 2019/2/15

発行所 〒737-0054 呉市上山田町2-28 安楽寺 Tel.0823-21-7561

ブツダの言葉

信楽晃仁

二月一五日は涅槃会です。お釈迦様が亡くなりになった日として、日本全国の仏教各宗のお寺が法要をお勤めいたします。涅槃とは「煩惱の火が吹き消された」安らぎの境地をあらわし、お釈迦様が肉体を滅し本当のお悟りにつかれた日とします。それに関わって親鸞聖人は『正像末和讃』に

『正像末和讃』に 釈迦如来かくれましまして 二千余年になりましたまふ

正像の二時はおほりにき 如来の遺弟悲泣せよ

と読まれています。正像末とは、仏教の時代観で正法||お釈迦様入滅後、五百年間(千年説もあり)で正しい教えが伝わる時代を表します。像法||正法の次に来る千年で、像の字は似ている



教えということ、本物ではなく偽物の意です。末法||像法の次にくる一万年で仏法が伝わらない時代のこととす。そこで仏法の時代観に従えば、お釈迦様の入滅からもう二千年以上がたち、本当の仏法が伝わらな

いと言われる末法の時代になってしまったと歎かれています。 私たちは「釋」というお釈迦様の姓を頂く者です。この法名は仏弟子としてお釈迦様の悟りに従いこの世を見据えて生きていくことの表明です。末法の世と罪悪無智なる我が身を自覚し、その末法の世とこの身を仏道



一枚の写真

埼玉県秩父郡の「尾ノ内百景氷柱」です。この氷柱は、秩父の観光を活性化させるために職人の手で作られたものです。今はライトアップされた幻想的な氷柱として、秩父の観光名所になっています。ここに行ってみて、何かを知ってもらうためには、皆さんの心を引きつけ、入りやすい入り口を作ることがわかりました。

お寺も仏教も、まずは知ってもらうための入りやすい入り口を如何に作っていくかが大切だと感じました。(信楽慧)

によって生き抜き、お釈迦様と同じ涅槃に至る道をたどりたいたいという願いを表す一字です。その意味でも法名は生前に頂くものです。

しかし末法と言われるのに、なぜ仏弟子を名のるのかというと、そこに道があるからです。親鸞聖人のお伝え下さったひとすじの道があればこそ末法でも仏道を歩めるのです。

そこです。お釈迦様の言葉に触れたいと思います。お釈迦様ご在世の時、ある信者がお釈迦様を訪ねてきて、こう質問したそうです。

「バラモンたちが言うには、彼らが御祈禱をすれば死者は天界に生まれるそうですが本当でしょうか」

バラモンというのは、インドのバラモン教の僧侶のことで、祈禱の専門家です。その質問にお釈迦様は直接答えず、お釈迦様の方から男に質問されたそうです。

『それに答える前に私から一つ質問がある。大きな石を池に投げ込み“石よ浮かべ、石よ浮かべ”と御祈禱すれば、石は浮かぶだろうか』

安楽寺マンガ通信

その40 信楽めぐみ作

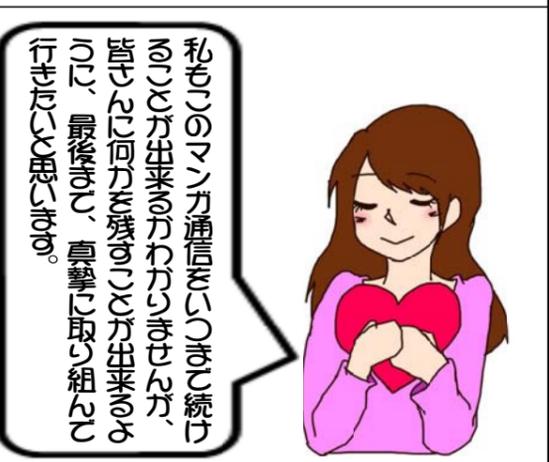
先日、私の大好きなアイドルの嵐が活動休止を公表しました。私も悲しかった。嵐の活動休止が、始まりがあれば終わりがあるもの。今回は休止の形ですが、いつか必ず終わる時が来ます。



しかし、彼らが私達に与えてくれたものはいつまでも残ります。それは、一重に彼らが10年と長い間、アイドルとしての仕事に打ち込み、誠実に取り組んで来られたからだと思います。



今日号の、安楽寺マンガ通信は10周年を迎えます。10年間も長く続けたものは初のこころ。



私みたいなマンガ好きのひとが続けたいから嵐の活動再開を祈りたい。嵐の活動再開を祈りたい。嵐の活動再開を祈りたい。

仏教伝道協会追悼法要

2月14日東京の仏教伝道協会センターで、仏教伝道協会、沼田智秀前会長の3回忌法要並びに物故者追悼法要がありました。生前、前住職が仏教伝道協会の理事長をしていたこともあり、ご案内を頂きお参りに行ってきました。法要では前門様のご臨席、また永平寺の貫首をはじめ、他宗の貫首も参加されるという、荘厳な中でのご法要でした。

現理事長の御法話で創始者の沼田恵範師は仏教聖典を世界の人々に届けることで、世界の平和を実現しようとされた方だとお聞かせいただきました。最初その志で走り出したけれども、資金不足で頓挫し、志だけでは実現できないことに気づき、そこからミットヨを興しマイクロメーターで世界のトップメーカーにまでしたそうです。しかしその起業は仏教を弘めるため、経済的な基盤を確立し、それをもって又仏教聖典を発行し、世界各国に頒布しているそうです。現在46言語に翻訳し、62カ国に頒布しています。一人でも多くの世界の人々に、仏教の精神に触れてもらいたい。それが必ず世界が平和に向かうことの確信があったのだと思います。

おしえを伝えることは、平和を実現することであることを改めて心に刻み、精進して参りたいと思います。



編後記 二月も後半に入ります。お正月となり、卒園式、そして入園式と本当に賑わすあじだに、月日は過ぎてしまします。一月にNHKの子ちゃんに叱られるので、なす天人は時間が早過ぎるのか、という質問が出ていました。答えは「天人になるとときめきかなくなるから」でした。子どもは一つ一つのことに興味があり、ときめきがあるから時間を長く感じるのだそうです。そうかと思いつつ、物事を見てみようと思つたのですが、それがなかなかできません。ふと気づくとどれも当たり前。当たり前で、全くとめきもありません。仏法は当り前ではなく有難く、全てが見える教で、有難いのがこの早さを止める鍵かとも知れませんが、有難い春を迎えたいと思います。(K)

お念佛のしず

「お念佛のしず」



浄土を願うようになるという事は、またそれを裏返して言えば、そのことにおいて、現実の自分自身の世界と人生について、深くかえりみるようになり、その世界と人生をきびしく厭うて生きるということであり、もとより、ここで現実を厭うということとは、何もこの現実における営みをあきらめ、それから逃避して生きるということではありません。私たちはこの現実をはなれ、それをほかにして、自分の人生を生きたらということではなく、浄土を願うといはい、現実の世界の私の世界と人生を厭うといっても、いずれもそれは、この現実のただ中における、人間の生きざまについていうことであります。浄土を願うようになつてくると、いま現に生きているこの現実の世界と人生について、いよいよこころをひそめて大切に思い、自分の

「いいやそんなことはありません」
『では、大きな瓶に油を入れて池に投げ入れ瓶が壊れて油が外に出る。その時皆で“油よ沈め、油よ沈め”と御祈祷すると油は沈むだろうか』
「いや油は浮かぶにきまつています」
『その通り。ではそなたの質問に答えよう。生前に悪業を積み重ねた者は、死後地獄に堕ちる。逆に生前に善業を積み重ねた者は、死後に天界に生まれる。御祈祷によって天界に生まれるわけではない。これが私の解答だ』と言われたそうです。
お釈迦さまはここで「自業自得」の道理を説かれます。“業”とは「行為」のことであり、我われが何かの行為を行えば、それが原因になつて次の行為が生まれ。その結果は必ず自分に返つて来るのだということ。自分の行った業は自分で責任を取るしかなく、祈祷の力で逃られるものではないといわれます。
「そんな事は誰でも知っている。当たり前」といわれるかも知れませんが、これがなかなか根の深い問題です。自業自得は知ってはいても、つい祈祷に走つてしまふのが人間のようです。その証拠に巷の神社仏閣

には家内安全、無病息災、商売繁盛、交通安全、受験合格、恋愛成就、ありとあらゆる私たちの欲望を、お祓いや供養によってかなえようと考える人が後を絶ちません。今年の神社仏閣への初詣参詣者を調べてみると、参詣者の多いベスト三〇の神社参詣者数合計は四五〇万人にもなりません。三〇の神社だけで、日本人の1/3が参つていくわけですから、その他全国の神社数を考えれば、日本人のどれ程の人が初詣に参つたのかということ。その人達はそこで何を思い、何を願つたのでしょうか。初詣に目くじらを立てることはないかも知れませんが、仏教寺院であっても堂々と「読経の功德(追善供養)で成仏する」と言う人もいますので、お釈迦様の教えをしっかりと聞いておかないとだまされかねません。
お釈迦様はこの自業自得は必然だと言われます。
『法句経』に
「まだ悪の報いが熟しない間は、悪



人でも幸運に遇うことがある。しかし悪の報いが熟した時には、悪人はわざわいに遇う。」
「鉄からおこつた錆が、それからおこつたのに鉄自身を食いつくすように、悪をしたならば、自分の業が静かに、氣をつけて行動しない人を悪いところ(地獄)にみちびく」
その他にも様々な言葉で、自業自得は現実であり、必然であり、現実であり、逃れることはできない。因果の道理を甘く見てはならないと、何人も忠告されています。
末代無智の私たちは自らの行為を、ついつい軽く見てしまいがちですが、私たちの行為の結果は必ず自分に返つてくることは明白なのです。ならば問われるのは今私が何を

しているかと言うことです。悪を犯すならば、それなりの報いが必ずやってきます。それは忘れていても、時間がたつても必ず現れるというのですから、氣をつけなくてはなりません。また私が幸せになるにも、それなりに業が必要です。では仏法が廃れた末法最初の涅槃絵図の場面、お釈迦様は最後の言葉を残されました。「諸々の事象は過ぎ去るものである。怠ることなく精進せよ」『涅槃経』と、無常を知り、仏道を励めと。これが私たち仏弟子にあてられた遺言です。この世も、この身も無常であることを知り、無常なるが故に、今念仏を励み仏と成る身になること。それがまことの幸せであり、私たち末代無智の仏弟子に残された仏道なのだとお聞かせいただくのです。

安楽寺法要案内

三月	彼岸会	日時 3月10日(日) 朝席10:00~ 昼席13:00~ 講師 山口 浄泉寺 吉田 龍 昭 先生 講題 善き友をもつということ
四月	花まり	日時 4月13日(土) 朝席10:00~ 昼席13:00~ 講師 吳 法眼寺 黒田 順 真 先生 講題 救済~救われるということはどういうことですか~
五月	宗祖降誕会	日時 5月18日(土) 朝席10:00~ 昼席13:00~ 講師 世界人権問題研究センター研究員 源 淳 子 先生 講題 「鬼」から「人」へ ~老病死を考える~
六月	永代経	日時 6月15日(土) 昼席のみ 16日(日) 朝席・昼席 講師 佐賀 圓光寺 五十嵐 雄 道 先生 講題 生死出づべき道 ~生と死は 反対のことなのでしょうか~

暮しの中の仏教語

『冗談』(じょうだん)

「あの人はよく冗談をどばす」とか「冗談はよして下さい」などと、冗談という言葉は、一般にふざけた話、滑稽な話、あるいはユーモアのある会話などの意味に使われています。しかしこれも元々仏教語

で、仏教では仏道修行に關係のない無用な対話を冗談と呼んで、仏教教団では固く戒められていました。冗とは「無駄、不要、余つてゐる」という意味ですから、無駄話という意味になつたのでしよう。
それがやがて仏道修行以外の場でも用いられるようになり、現在のよう日常語になつていったようです。仏道修行者には無用なものだつたようですが、ユーモアは人間関係をなめらかにし、楽しくするなくてはならないものとなりました。笑えない冗談ではなく、笑える冗談は大歓迎です。

